



発行
KOA 森林塾
(事務局)
0265-70-7065
編集 早川清志
題字 島崎洋路

『傾斜地にて』 専門コース第三回開催報告

専門コースの最終回は、いつも秋とともにやってくる。錦秋にはまだ早いけれど、朝の空気は、落ち着いた雰囲気をはらみ、春の和やかさや夏の激しさとはあきらかに違う。そんな中、山小屋へ久しぶりに集う面々は、手に手に流線型の怪しい機械を持ち、足元は一樣に黒くタイトな仕様で、小屋へ入ろうともせず、今にも現場へ向かいそうな面持ち。



傾斜地は体勢もしっかりと

地林から傾斜のある林分へ。伐倒方向・木が落ちていく範囲・不安定な斜面といった、今まで以上の緊張が強いられる場面の連続が予測された。

しかし、さすが専門生、確実に安全を確保し、しっかりとした体勢で、チェーンソーに振り回されることなく、目



今までの経験を生かして！

的意識を持って間伐をして頂きました。

その後ろ姿はたくましく・・・もう少し、いやもっともっと、この方々と山仕事がしてみたいと想う・・・寂しさの募る夕方の傾斜地にて。

専門コース 第三回
10月1日(金)～
10月3日(日)

一日目
8時30分
鳥崎先生の山小屋に集合。久しぶりの再開に...

や？みんなマイチェーンソーだ！

8時40分
保科先生のあいさつ。日程説明と班分けの後、傾斜地での伐倒についての説明。またまた初日の初っ端から難しいことを...



大きめのチェーンソーで

9時10分
現場へ移動して伐倒開始。まずは、傾斜の上方へ、2タイプの伐倒。伐つた木の倒れる方向と落ちる方向を考えて、追いつく位置を確認して、退避路を確保してから伐倒を！造材・枝払い傾斜の上から木の動きに注意して！今回も伐倒係・検尺係・片付け係の分担作業で。

12時
小屋に戻り昼食。鳩吹公園は、遠足の親子でにぎやか。ポカポカ陽気の芝生の上で昼食。

13時
伐倒再開。今度は傾斜の下方へ、2タイプ。倒れていくときに加速度がつくので、退避は早めに。各班毎に休憩を取りながら間伐をしていく。早くも、木洩れ日が心地良くなってきている。

15時45分
作業を終了し、小屋へ

16時30分
戻ってチェーンソーメンテナンス。保科先生の講評後、解散。

二日目
8時30分
鳥崎先生の山小屋に集合。体操をしてから現場へ。

9時
10m x 10mの作業範囲を確認して、上層樹高と本数の目視から、10年後の保残木数を計算してみる。残す木を決めて、伐倒開始。昨日の上下各2タイプの伐り方はもちろん、集材方向も考慮してみよう。伐倒条件が多くなったり厳しくなると、どの木から伐るか次はどの木かという伐倒順は、何時にも増して重要になってくる。

12時
小屋へ戻り昼食。

13時
伐倒再開。等高線方向にも伐倒してみよう。枝



傾け～！倒れる～！

16時15分
現場の作業を終了し、小屋へ。チェーンソー清掃。
16時30分
終了。解散。

三日目
8時30分
島崎先生の山小屋集合。あいにくの雨、ためいきの嵐。薪ストーブの暖かさ

9時
板の間にビニールシートを広げ環境設定。ワイヤー先端の寄り添ったストランドを、3本まとめである程度の長さ剥がしていく。そして長さ15センチ程度のティアドロップ型の輪ができるように、剥がしたストランドを再び寄り添わす。デンデン太鼓のような、その腕の、ひとつひとつのス



背伐り...即復習

12時
やつと昼食。
13時
降り止まない雨の中、現場へ道具を回収しに行く。
14時
スウエーデンのチェーンソーメーカー「ハスクバーナ」による伐倒講習会のビデオ鑑賞。

15時30分
保科先生講評。これにて今年度の専門コース本講座を終了します。皆様お疲れ様でした。有難う御座いました。

参加者/大河内さん、斉藤さん、長坂さん、松岡さん、松永さん
講師/保科先生
スタッフ/大野、小泉、早川、坂野



編み編み

次回以降の予定

第13、14回
10月16、17日
(土、日)
測量・製図、林道設計

一日目が小屋裏で測量、そしてそれを図に落としてみます。スケール、分度器、鉛筆、電卓。二日目は林道を設計しこれを歩道として開設してみます。ともに8時30分小屋に集合。両日とも島崎先生の担当です。

集中コース秋の部

10月29日、
31日(金、日)

森林塾のエキスを三日間でやってみます。調査から間伐、簡単な集材、プラスチック木登り。初日が両先生の担当となっています。ただ今、塾生



愛？加工？

第15、16回
11月27、28日(土、日)
復習・炭焼き

復習の希望項目は、事務局まで。ちなみに近年の内容は、「保科先生の山林見学」・「間伐」となっています。炭焼きは、移動式炭化炉とできればドラムカンでもやってみます。夕方からは、少し早いですが、希望者で忘年会を計画。幹事さん募集中。炭出しは翌朝になります。炭焼き担当は保科先生です。





リレー通信

『酒造り(米づくり)山造り』

高橋 庄作

我が家の裏山の、杉林の中に大小三本の櫟がある。小学生の頃祖父に連れられていったのが始めてで、その頃もかなり大きいと思ったのだから樹齢八十〜百年を越えていると思う。

その櫟は酒造道具のひとつで、酒を搾る時に使う酒槽の男柱 にするために植えておいたそつだ。もっとも今では油圧式の自動搾機と



なりその用を足すことはなくなつたが、当時は酒造道具も木製品が多く、かなりのものが自己調達されてきたようである。大桶を作るための杉板材もいまなお土蔵の屋根裏にたくさん残っているし、その土蔵の酒蔵さえも自前の山から伐り出した杉・松材がふんだんに使われている。祖父は酒造りの傍ら林業経営にも力をいれ、木の特性を生かした使い方にすぐれており、特に酒蔵建築の際には木取の指示まで祖父自身がしたそつである。また、端材をうまく利用して物を作るのが好きだった様で、今でも重宝しておるものに天板が黒光りしている松材の踏み台がある。子供の頃から今なお常時使用している逸品である。

このような身の回りに木製品が多くある環境と、山(森林)好きの祖父と酒造りに力を入れてきた父を見て来て私もいつしか『自然の素材』について深く関心を持つようになった。酒造りの原料である『米』然りである。何と云つても日本酒の礎は米である。当蔵では農林業を営みながら酒造りをしてお

り、十六年程前から自家田で酒米『五百万石』の無農薬栽培に取り組んでいる。無農薬米作りでもっとも苦労するのが雑草の除草作業である。はじめの数年は手作業による草取りをしていたものの、作付面積が増えるにつれ間に合わなくなり、無漂白再生紙を用いた『紙マルチ除草法』を取り入れ、まずまずの実績を挙げている。また一昨年から養殖コイによる抑草法にも取り組んでますますの成果を収めた。これは自宅庭の池で産卵したものを孵化させた二〜三歳コイを田植え数日後に放飼し、泳ぎ回りながら水底を食むコイの特性で泥を攪拌して、雑草を浮かせ、濁り水・深水で雑草の発芽・生育を抑制する方法である。

米作りでもうひとつ苦労話がある。酒米の五百万石といふ品種は早稲に近く、近隣のほとんどの田で作付される飯米『コシヒカリ』は東北では晩稲で、十日から二週間ほど穂の出る時期に差が生じ、出穂の早い酒米五百万石には雀が一斉に群がり大粒な穂が食い荒らされる。対策として田んぼの前面に網をかかけたが、雀のほが一枚上手で、集団で網の上に乗し、網が沈んで網目から飛び出す穂を食べるようになった。雀も生きるのに懸命なのだ

から多少の被害は、と今ではあきらめることにしている。もうひとつ酒造りに欠かせないのが水である。当蔵では裏山に連なる大戸山系の伏流水を水嚮として用いているが、この水がバブル景気の真っ只中に危機にさらされたことがあった。この裏山を造成してゴルフ場をつくる話を持ち上がり、そのとき私達数人が頑強に判を押さなかつたことで、今日安心して酒造りが出来、水も近隣の田畑も救われたと思つている。(ちなみにこの当時会場近隣に出来たゴルフ場をはじめとするリゾート施設はその大半が現在破綻状態にある) こうしてみると祖父等先祖が代々、農林業を営んできたことが今日の酒造りの環境づくりにいろいろな形で役立っているものと大いに感謝したいと思つた。 今日では山林事業も経済的には立ち行かない現状にあるも、せめて裸山にはしたくないし、水嚮を守りたいと云う思いから小規模山林所有者の一人として、酒造業の合間をみて、杉や雑木苗の植付け、下刈り、雪起し作業などを見様見真似で行つてきたものの、それも二十年ばかり遠のいていた。 この様な時NPO法人緑のネットワーク、近くの山の

木の家をつくる運動』のMO Kスクール受講生募集があり、「山」の現状を知るだけでもと早速参加し、そこで出会ったのが島崎先生の「山造り承ります」であった。その「今、山は大変な時代を迎えている」から始まる先生の講義には、まさに目から鱗が落ちるの如く、衝撃的な感動を覚えた。あきらめかけていた『山づくり』水づくり』への想いに火がついた感じがした。是非もう一度お会いしてもっと話をお聞きしたいと思つての。『森林塾夏コース』への参加であった。まさしく見る事、聞く事すべてが今後の即実践に役立つ充実した研修となった。この成果を一人でも多くの周囲の人達に語り、そして若い者へ伝えていきたいと思う。改めて先生方にお礼を述べたい。

まず島崎先生…豊富な知識で理論と実践をわかりやすくご指導いただき心より感謝申し上げます。まだまだ聞き足りたりないところも多く、次の機会を待ちたいと思います。

校長の保科先生…我会津藩の藩祖である保科正之公が信州高遠からという事もあつてか、一言一言に重みがあり、心に深く響くものがありました。塾頭の早川先生…常に全

体の流れを把握、作業の安全を見守ってください、心強いものでした。 つぎに我が第一班の後藤先生には、プロの技を見せていただきました。適切な判断と確実安全な作業手順の指導には心より感謝です。 また、第二班の川島先生には見事なブリ縄実演をみせていただき、今回参加の目的の一つでしたので、この体験をもとに更に訓練で自分のものにならしたいと思つています。 そして全スケジュールの司会、進行役の坂野先生、ロッキングトラクター操縦での熟練した技には只々『スバラシイ』のひとつことです。 信州伊那の地での研修で中味の濃い多くのものを持つて帰りました。 最後に「森林塾」益々の発展と先生方そして、受講した同窓の皆様のご活躍とご健康を念じて、また再会の機会あらん事を期待して終わりと致します。 ありがとうございます。 男柱(おとこばしら)



リレー通信

山仕事と私

堀 晃

私は生まれも育ちも東京、といっても多摩地区だったので、小さい頃はまだ田んぼや梨畑がたくさんあり、自然の中で遊べた最後の世代であった。父は名古屋の生まれ、祖父は岐阜県明智町で生まれ、明智には山と田んぼ、古い小屋とお蔵、そして先祖代々のお墓がある。



私は、大学くらいまで、夏休みなどに明智にたまに遊びに行っていたが、川で遊んだり、近くの東海自然歩道を散歩するくらいで、山の中に入

ったことはなく、どこまでが家の山なのかまったく知らなかった。就職してからは、忙しくつめつきり明智に行く機会が減ったが、結婚してからは、毎年お盆のときにお墓参りに行くようにしていた。しかし、祖父が亡くなってからは、誰も管理をしていないため、あたり一面草ぼうぼう、まずは草刈をしないとお墓に辿りつけない状態だった。草刈機もなかった当時、近くの旅館に泊まりながら、鎌を手に背丈ほどに伸びた草と格闘するお墓参りは、当然のことながら印象も悪くかなりの負担となっていた。

やがて、仕事の関係で東京から群馬の山奥に引越して、そこで下刈りなど山仕事の手伝いをする機会があった。今思えば、それが私の山仕事の初体験であったわけだ。大鎌を振るって、夏の暑い日にシャツがしぼれるほど大汗をかき、終わった時のすがすがしさ、ジューズのおいしさ、といったことを思い出した。

その後、山形の田舎町に引っ越すことになり、ここでは畑仕事の手伝いを体験した。大地の恵み、収穫の喜びと感動を知った。そのようの中、

明智のお墓参りも続けていたが、引越すたびにどんどんと距離は遠くなり、負担は増すばかり。でも、自然に触れる生活が長くなったせいか、荒れるにまかせている明智の山や田んぼが妙に気になり始めていた。

そんな折に体調の悪い父の代わりに出席した、山の杭打ち作業をするという説明会。正式な地籍調査はまだ十、十五年先になるため、山の境界線を知らないのだ。父も全部を祖父から教わっているわけではない。山の公園や祖父のメモなどを頼りに、山歩きが始まった。しかし、沢や尾根根拠はわかりやすいものの、岩や木が塚となつている所では、それらしいものがないなど、頭をかかえるばかり。八月から杭打ち作業が少しずつ始まっている。

山の中を歩いているうちに、最初はきつかった斜面もしだいに楽に登れるようになり、心地よい汗をかき、山は荒れているものの森林浴が効いたのか、あんなに負担と不満の対象であった明智が、なんだ家に山があったではないか、天然に近い自然があるではないかと価値観を転換させられてしまった。

ちょうど仕事が一段落していたこともあって、なんと思い切って岐阜県にUターンするというかイターンしてしまつた。今までもなんとなくなつてきたのだから、これからは何とかなるだろうと。現在は、土日は必ずと言って良いほど恵那から明智に通い、草刈や畑作り、山の手入れなどをしている。人は変われば変わるもの。でも、振り返ってみれば、こうなるべく田舎へ田舎へと歩んできたような気がする。そして今ではもう、森林塾で山造りについて学べば学ぶほど、早く家の山に手を入れたくてしかたなく、思いは焦り、時間と技術が足りない自分に歯がゆい状態である。

氏原作の映画「阿弥陀堂だより」のストーリーは、「なかなか日の目を見ない小説家の夫と大病院で働く有能な医者との妻の二人が、妻の心の病をきっかけに、信州に移り住むことから始まる。山里の美しい村に帰った二人が、老婆おつめや声の出ない少女小百合に出会い、村で診療所を開き、人々の診察を通

して、医者としての自信と責任を取り戻してくる。」というもの。そして舞台に、古くからの日本の原風景を、奥信濃と呼ばれる地域に求め、一年間の定点的な撮影をし、日本人の心の故郷を映像化したような映画、だそうだ。だんだんと長く静かになつていく夜に、以前から気になつていた映画を見ようか、と思つ。お気に入りのキリッとした辛口な日本酒を片手に。

コラム

「信州の山奥は奥が深い、どこまで行っても律儀な信州人の跡が存在し、それがまた、ただの自然そのものよりも人の心に訴える懐かしい風景として目に写るのである。誰もが無意識の内に持っている人間としての基本的な暮らし方の理想。そういったものが信州の田舎には色濃く保存されている」とおっしゃったのは、作家の南木佳士氏。



おわりに

春夏秋冬。あなたはどの季節が好きですか。私は、これから巡ってくる季節、と答えるかもしれないのです。

野分・解夏・白露・秋暁・待宵・・・そんな、これからの秋。「時の香り」を探すなら、あなたはどこへ行きますか。



投稿大歓迎。ご意見、ご質問、ご要望、事務局まで。

TEL 0265-70-7065
FAX 0265-70-7994
E-mail: ki-hayakawa@koanet.co.jp
sh-sakano@koanet.co.jp
携帯:090-4463-0062 (開催日)
URL http://www.koanet.co.jp

